

第5章 考 察

第1節 加賀における7～8世紀の煮沸形態土師器

これについては、坂井秀弥⁽¹⁾、岸本雅敏⁽²⁾、吉岡康暢⁽³⁾の各氏によって整理がなされており、焦点は律令制確立期におけるロクロ土師器の出現と「北陸型⁽⁴⁾」煮沸土師器の成立に関わる須恵器工人と土師器工人の生産組織の評価の問題であると言えよう。ロクロ土師器生産の評価については概ね意見の一一致をみており、旧来の土師器生産が須恵器生産組織のなかに再編成された新たな土器生産体制下でなされたものと理解されている。その出現の時期は、3氏ともほぼ8世紀前葉(平城宮I⁽⁵⁾)で一致しており、木立雅朗氏⁽⁶⁾は加賀で須恵器窯に近接してある小形平窯⁽⁷⁾を「土師器窯」と位置付け、吉岡編年⁽⁸⁾I₁期から出現するそれがロクロ土師器の出現に深く関わっていると指摘している。普及の時期については、坂井氏の越後、吉岡氏の北陸南西部を対象とした検討により、ともに8世紀後半以降とされている。

本稿では、加賀⁽⁹⁾を中心にロクロ土師器の出現と「北陸型」の成立・普及に関する基本的な点を整理し、先学の意見を検証してみたい。

甕 古墳時代以来の形態、成形・調整のものをA類とし、大型品（長胴）をA I、中型品（器高に比して口径が大きい）をA II、小型品をA IIIとする。把手付のもの（器高に比して口径が大きい）をB類とする。本遺跡13号土坑でII類とした口縁端部に面を持つものをC類とする。ロクロ成形・調整を伴うものをD類とし、大型品（長胴）をD I、小型品をD IIとする。

壺 非ロクロ成形・調整のものをA類、同様の成形・調整で口縁端部に面をもつものをB類、ロクロ成形・調整のものをC類とする。

瓶 古墳時代以来のものをA類、ロクロ成形・調整のものをB類⁽¹⁰⁾とする。

カマド形土器 8世紀前半代までは出土例⁽¹¹⁾があるものの、散発的であり、出土しない遺跡のほうがむしろ一般的である。日常の使用に供する普遍的な器種とは言いがたい。

○ I 期 6世紀以来の器種を継承する。基本的なセットは、甕A I～A III類、B類、瓶A類。ただし、壺A類は該期に越前での出土例がある⁽¹²⁾ことから加賀においても存在の可能性は残る。該期の資料としては、本遺跡6・7号溝、11・15号土坑、千崎遺跡⁽¹³⁾11号住、御経塚ツカダ遺跡⁽¹⁴⁾80—5号住の出土品がある。

○ II 期 甕C類、壺A類が出現する。該期の集落の調査例はほとんどなく、漆町遺跡⁽¹⁵⁾に断片的な資料があるにすぎない⁽¹⁶⁾。甕C類の口縁部形態は須恵器の手法からなんらかの形で影響を受けた⁽¹⁷⁾ものとみられる。壺B類の出現の可能性もある。

○ III 期 ロクロ土師器甕D I類、壺C類⁽¹⁸⁾が出現する。甕B類は壺A類の普及とともに消滅したものとみられる。ロクロ土師器出現の大きな画期であるが、その量比は極めて限られたものであり、基本的なセットはII期を継承している。該期の資料には本遺跡13号土坑出土品がある。

時期	甕				壠			甑		佐々木ノテウラ	集落遺跡	須恵器窯			
	A		B	C	D	A	B	C	A	B		加南	辰口	末	
	I	II	III	I	II										
7世紀	I										6・7溝 11・15土坑	千崎11住 御経塚ツカダ 80-5住	金比羅6 11 マルヤマ1		
	II										" 10 5	" 7-2			
	III										13土坑	(黒瀬2) 湯屋B-1			
	IV										163土坑 " 139土坑 " 105土坑	桃の木山1 サクラマチ 戸津46 3			
	V										1溝(古)	二ツ柴 一貫山1 1			
	VI										篠原下開発A 西念・南新保 下開発G 三浦	箱宮5 金谷地 ST-02 和氣後山谷2 浅川1 和氣和田見 SS-01			

第3表 加賀における煮沸形態土師器の変遷

○IV期 各器種が最もバラエティーを持つ⁽¹⁹⁾段階で、ロクロ土師器が一定の割合を占めるようになるとともに、「北陸型」甕・壠が出現する。甕D II類も出現する⁽²⁰⁾。該期の資料には、今町A遺跡⁽²¹⁾溝状遺構、上二口遺跡⁽²²⁾A 4号住、保賀B遺跡⁽²³⁾1号土坑出土品などがある。

○V期 IV期と同様、各器種ともバラエティーに富むが、ロクロ製品の比率が5割近くに達し、甕も含めた「北陸型」煮沸土器セットが成立する。非ロクロ製品では、甕が強固に残存するが壠は比較的早くロクロ製品に移行しているようである。IV・V期の非ロクロ土師器とロクロ土師器の比率は遺跡の性格によってばらつきが大きいと予想される。該期の資料には、篠原シンゴウ遺跡⁽²⁴⁾1号土坑、篠原遺跡⁽²⁵⁾出土品がある。

○VI期 III期以来のロクロ土師器の出現による煮沸土器の混沌とした状況が払拭され、「北陸型」が確立し普遍的にその使用が認められるようになる。わずかに小型甕にA III類とD II類の不定型なものが残存するにすぎない。本段階の比較的初期の資料は下開発遺跡⁽²⁶⁾などで確認されている。

以上、各器種の消長をみてきたが、7~8世紀の加賀における煮沸土師器の変化の画期を整理すれば、II期（7世紀第3四半期）が甕C類の出現にみられる須恵器製作技法とのなんらかの接触、III期（7世紀第4四半期）がロクロ土師器の出現、IV期（8世紀第1四半期）が「北陸型」の出現、V期（8世紀第2四半期）が「北陸型」のセットとしての成立と一定の普及、VI期（8世紀第3四半期以降）が「北陸型」の確立と広範な普及の時期と位置づけられよう。従来の説と対比すれば、少なくとも加賀では、壠A類の出現が7世紀代に遡ること⁽²⁷⁾、ロクロ土師器の出現が7世紀第4四半期にあることの2点で相違を見い出せる。「北陸型」普及（ロクロ土師器の普及）の時期の点ではほぼ同一の見解に達した。煮沸土師器の「北陸型」への転換には、吉岡氏が指摘したとおり、「一定の時間的経過」を要しており、律令制下の再編された須恵器工人によるロクロ土師器生産が、ただちに土師器工人を吸収ないしは消滅に追い込んだことは認めえないが、VI期

以後、土師器工人独自の土器生産体制は基本的には解体したものと理解している⁽²⁸⁾。

第2節 掘立柱建物の柱穴内土器埋納について

掘立柱建物の柱穴からその建物の時期を決定しうる遺物が出土することは極く少なく、通常は土器少片が数点出土するか、あるいはまったく遺物が出土しない。しかし、完形もしくは完形に近い土器、銭、鉱滓などが出土地する事もあり、それらは柱穴の掘方部分から出土するものと、柱痕部分から出土するものがある。前者はこれまで地鎮・鎮壇行為を示すものとして注目されてきた⁽²⁹⁾が、後者はあまり注目されておらず、漠然と祭祀行為とされたり、偶然の所産と考えられている。本節では本遺跡の2・3・4・5号建物などで確認された柱穴の柱痕部分から完形あるいは完形に近い土器が出土するという出土状態に注目し、これがいかなる意味を持つのかとその解明に向けて、まず石川県内の例を集成しその基本的事実の確認を行おうとするものである。

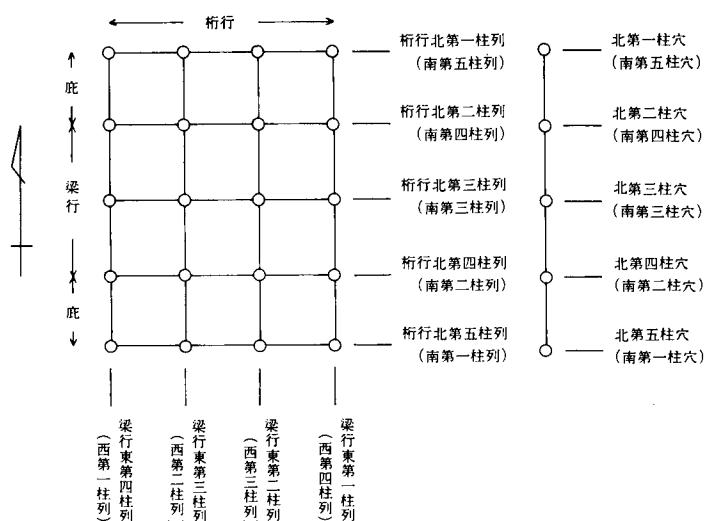
なお今回集成した資料には未発表のものも含まれるが、報告書刊行の予定が近い遺跡は遺構図や遺物実測図を掲載し、報告書刊行の予定が遠い遺跡は文中で触れるのみに留めた。協力していただいた各遺跡の調査担当者に深く感謝する次第である。また挿図中の掘立柱建物の柱穴の呼び方は『中島町小牧・外遺跡⁽³⁰⁾』の報文を基本として第56図のように行ない、P-125のように柱穴番号のあるものはそれも併用した。

(1) 小松市佐々木ノテウラ遺跡（第57図、第58図）

本遺跡では第III期とされた10世紀前半の掘立柱建物と第IV期とされた12世紀中葉～後半の掘立柱建物の中で柱穴の柱痕部分から完形に近い土器を出土するものが確認された。これらについては第3章で詳しく述べられているのでここではそこで触れられなかった部分について述べてみたい。

まず第III期のものについてである。（第57図）

4号建物は3間×2間の南北棟で柱はすべて抜き取られている。遺物は梁行南第1柱列東第2第3柱穴を除くすべての柱穴から出土している。その内桁行東第一柱列のP-21、P-189から完形に近い土器が出土している。これらの柱穴からは他に土器小片も出土して



第56図 掘立柱建物模式図(1)